≪特集2：闘病記研究会シンポジウム≫

開設後3年経過した闘病記文庫の現状と課題

鈴　木　孝　明*

[抄録]　奈良県立医科大学附属図書館では，医学科学生の要望を契機に，2008年3月に「闘病記文庫」を開設し丸3年が経過した。それは患者の気持ちを知る身近な教材としての闘病記を収集し，病名別に分類・配架したものである。闘病記文庫設置により，闘病記の貸出冊数が飛躍的に増加したが，医学科学生の利用は看護学科学生に比べてまだまだ少ない。不十分な冊数，受入基準の不備など課題もいくつかあげられるが，年次的な解決に努め，闘病記文庫の利用を活性化していきたい。

[キーワード]　闘病記，医学図書館，Narrative-Based Medicine，図書館サービス，蔵書構築

1. はじめに

奈良県立医科大学附属図書館（以下，当館）では，2008年3月10日に「闘病記文庫」（図1）を開設し，丸3年が経過した。開設までの経緯や準備の詳細は既に報告[1]されているので，開設後の資料の収集・利用状況ならびに課題について報告する。

図1　闘病記文庫

* Takaaki SUZUKI
奈良県立医科大学附属図書館
〒634-8523 橿原市四条町840
E-mail : tsuzuki@naramed-u.ac.jp

2. 当館の概要

奈良県立医科大学（以下，本学）は奈良県橿原市に位置し，県中・南部の医療・医育機関の中核を成している。医学部の下に医学科，看護学科を擁し，附属機関である当館の利用対象者は，2010年度においては大学院生を含めた学生約1,050名，附属病院を含めた教職員約1,460名となっている。

2007年度に公立大学法人となってからは，図書館の重要性が予算に反映され，資料費の増額や施設の改修等が実現している。

3. 開設の経緯

3.1. EBMの普及・NBMの提唱

「患者中心の医療」を実践する手法の1つとしてEBM（Evidence-Based Medicine）が提唱され，われわれヘルスサイエンス分野の図書館員も情報提供面において貢献できるようになってきた。他方では患者個々の声に耳を傾け，その価値観，人生観に合った医療を目指すNBM（Narrative-Based Medicine）が提唱され，両者の関係はよく車の両輪に例えられている。

当館では10年ほど前から図書館員のEBMへ

の寄与に関心を持ち，EBM関連研修への参加，情報検索スキルの向上や臨床支援ツールの導入を進めてきたが，NBMが紹介されると患者やその家族の心境を知ることができる身近な教材として闘病記にも注目するようになった[2)]。

3.2. 学生の声

2007年10月のある昼休みに当館メインデスクを訪れた1人の医学科3年生から，次のような要望を受けた。

「患者中心の医療」がいわれるようになって，医師を目指す学生にとっても患者の気持ちを知ることの重要性が増してきた。ある疾病に罹った患者の気持ちを綴った闘病記は身近な教材であるが，個人で収集できる冊数は限られているので，図書館で体系的に収集し，誰でも利用できるようにしてほしい。

その熱意と，提供された他館の事例や「闘病記文庫 棚作成ガイドライン」[3)]（以下，ガイドライン）などの資料に動かされ，上申することにした。当時の図書館長も闘病記に理解を示し，館長の諮問機関である図書委員会に諮ったところ館長に一任された。後日，館長に対してその学生は熱意のこもったプレゼンテーションを行い，晴れて闘病記文庫の設置が認められた。

4. 闘病記文庫の構成

4.1. 分　類

闘病記文庫の最大の特徴は，病名ごとに分類配架することである。『魔法をかけられて』（白血病），『モルモットタイちゃん』（ベーチェット病）など書名だけでは病名はもちろん闘病記かどうかも判断できないものも多い上に，日本十進分類法では文学に分類されることが多いので，一般の書店や公共図書館では利用者が目的の疾病の闘病記を探すことが困難である。

ガイドラインでは疾病を「がん，小児がん，疾病，脳，障害，心臓，精神」の7つの大分類の下に，小分類として，たとえば前掲の「白血病」は「がん90」，「ベーチェット病」は「疾病117」というように各疾病を体系付けている。当館ではこれに著者記号を付与し，各疾病ごとに著者記号の順番に並べている。さらに収集の過程で「総記，小児，その他」を加え，大分類を10個とした。各小分類にはガイドラインにはない「0」と「99（疾病は199）」を設け，前者は複数の小分類を合併も含めて扱ったもの，後者はどの小分類にも含まれない疾病の場合に付与している。

4.2. 収　集

闘病記の収集にあたっては，初期の目標を200冊と定め，まず当館の蔵書のうち，ガイドラインの闘病記リストに掲載されているものを中心にかき集めた。次に学生用図書購入予算を充当し，闘病記リストのうち比較的出版年の新しいものを購入しようとしたが品切れや絶版が多いため，闘病記専門の古書店パラメディカへ依頼し，不足分を補った。同時進行で，スタッフが闘病記リストを持って近くの古書店を巡り，購入したものも少なくない。また，文庫設置を要望した学生も自ら読み終えた本を寄贈してくれたり，古書店回りもしてくれた。そのほか，ガイドラインを作成された健康情報棚プロジェクトからも寄贈していただくなどして，目標の200冊を超えることができた。その間，当館スタッフ全員の創意工夫と献身的な努力により見出しの作成や図書の装備等が進められ，学生の要望からわずか半年足らずでスタートを切ることができた。

その後，2008年度145冊，2009年度81冊，2010年度69冊と受け入れて，2010年度末には606冊としている。

大分類別にまとめると表1のようになり，「が

表1　蔵書構成（大分類別）

大分類	小分類	冊数
がん	0～95, 99	201
小児がん	0～19, 99	19
疾病	0～134, 199	195
小児	—	7
脳	0～41, 99	82
障害	0～6, 99	20
心臓	0～22, 99	18
精神	0～16, 99	51
その他	—	6
総記	—	7
計		606

ん」「疾病」が約200冊，「脳」82冊，「精神」51冊と続いている。

最近では闘病記だけでなく，患者会資料や患者向けの情報誌などの収集にも着手している。

5. 利用状況

当館では2004年度に図書館トータルシステム導入が実現し，タイトル単位の貸出統計が可能となったため，闘病記の利用状況は表2のように2004年度から確認できる。

文庫設置以前は看護学科学生の利用が大半で年間平均23冊の貸出であったが，設置後の年間平均貸出冊数は170冊となり，開設前の7.4倍となっている。

それまではほとんどなかった医学科学生の利用増加が際立っているが，看護学科学生はその2.5倍の利用である。

教職員では一般事務の利用が半数を占め，看護師（技師）と教員がほぼ同率である。従来は当館の偏った蔵書構成のため一般事務職員の利用が非常に少なかったが，闘病記文庫の設置が新たな利用者層を産み出したことは興味深い。

6. 現状の課題

6.1. 所蔵冊数

ガイドラインに掲載されている闘病記の総数は2,105件であるのに対し，当館では複本を除いて558件（26.5%）の所蔵であり，4分の1に過ぎない。また，疾病数は333種類に対して150種類（45.0%）であり，まだまだ十分とはいえない。

今後は年間100冊ペースで収集し，次の3年後には1,000冊を超えたい。

6.2. 広報活動

広報活動は開設直前から始め，学内・館内掲示，当館ホームページ，ブログ，学報，学内向けメーリングリストのほか，広報用チラシを作成して，学内全部署，県内公共図書館へ配布するなど思いつくままに行った。

マスコミへの働きかけは特に行わなかったが，開設4カ月後の2008年7月にNHK奈良の情報番組から取材を受け，関西地方のテレビやラジオで紹介されると，学外からの来館や電話での問い合わせが相次ぎ，闘病記寄贈の申し出も受けた。

昨年9月には朝日新聞奈良版の本学周辺の紹介記事の中で闘病記文庫も取り上げてもらい，やはり学外からの反応があった。

このようにマスコミの影響力を実感したが，学外からの関心は一時的なものであり，学内利用の促進には至っていない。

学生が闘病記に関心を持つタイミングは導入教育時ならびに臨床実習時と考えられる。医学・看護学教育に活用してもらうためには教員への働きかけも必要であろう。

また，闘病記文庫目録を作成し広く配布することで，普段来館されない学内外の方々の目に触れる機会を増やすことも重要であると考えている。

表2　利用者区分別貸出冊数

年度	教職員				医学科学生							看護学科学生					計
	教員	看護師技師	一般事務	計	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	1年	2年	3年	4年専攻科	計	
2004	2	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	13	3	7	30	33
2005	0	3	3	6	0	1	0	0	0	0	1	0	2	9	7	18	25
2006	0	0	5	5	0	0	0	0	1	0	1	2	1	3	0	6	12
2007	1	0	1	2	0	1	15	1	1	0	18	0	0	4	0	4	24
2008	4	8	12	24	4	6	1	13	14	9	47	14	12	40	40	106	177
2009	20	9	24	53	8	9	4	6	3	4	34	7	8	29	24	68	155
2010	11	19	29	59	2	0	3	6	3	11	25	34	7	32	22	95	179
各計	38	40	74	152	14	17	23	26	22	24	126	64	43	120	100	327	605

6.3. 受入基準・分類体系

闘病記とは，ガイドラインによると，「病気と向き合った過程を綴った手記」と定義されている。マスコミに取り上げられた直後には自費出版された本の寄贈が相次いだ。その際に前述の定義に則った受入基準を定めていないため扱い方に迷ったものもあった。

闘病記文庫の受入基準を今年度中に整備したい。

一方，次々と刊行される闘病記の中には既定の分類ではあてはまらない疾病も増えてきており，小分類を「99（疾病は199)」として急場をしのいでいる状況であるが，これが増え続けると疾病別分類の意味が薄れてしまうので，ガイドラインの分類体系を独自に拡張し，アクセスの向上を図っていきたい。

6.4. 学外者利用

現在は学外者への貸出は行っておらず，来館されても館内での閲覧や必要部分の複写に限られている。

闘病記を必要とされている方の中には入院中や在宅療養中など来館できない事情の方々も多いと思われる。

現行の図書館利用規程では，学外利用者への貸出を認めていないので，まずは規程の改正から着手し，より広範なサービスを展開する下地を作りたい。

6.5. 闘病記以外の資料

健康情報棚プロジェクトが提唱している「健康情報棚」構想とは，病名分類された闘病記にプラスして，介護記，患者会資料，医学書，福祉・社会保障が1つの疾患名で串刺しされているイメージである[4)]。

当館の場合，医学・看護学図書が大半を占めているため，闘病記文庫コーナーに別置するものは前述のうち医学書を除いた資料群と思われる。現状では闘病記の冊数も十分ではないが，同時進行で患者会資料等の収集にも力を入れていきたい。

7. 今後の展望

本学は同一敷地内に附属病院があるが，患者図書室のような施設が院内にない分，当館がその役を果たすべきと考えている。当館にはエレベーターがなく，閲覧室は2階に位置するため，患者や高齢者にとっては物理的障壁があることは否めない。けれども奈良県中・南部の医学・医療情報拠点として，これらの資料を体系的に収集し，医学・看護学教育へ寄与すると共に，このような情報を必要とする一般の方々へ貸出も含めて開放していく意義は大きいと考えている。

前述の課題は一朝一夕にクリアできるものではない。年度ごとに目標を定め確実に歩を進めていきたい。

8. おわりに

当館に闘病記文庫を設置して3年後にこのような報告をする機会をいただいたことは，漫然となりかけていた態勢を見直すことになった。次の3年後に今回と同じ課題をあげることがないよう努めていきたい。

最後に，4年前に闘病記文庫設置を要望した学生は，昨年度の最終学年時に日本学生支援機構主催の「優秀学生顕彰」社会貢献部門において，その功績も認められてみごと大賞を受賞した。今年度は帰郷し研修医として日々研鑽されていることであろう。患者中心の医療の実践者としての活躍を期待している。

本稿は，闘病記研究会シンポジウム（2011年2月5日航空会館）で発表した内容に加筆修正したものである。

参考文献

1) 川村殉子．奈良県立医科大学附属図書館における闘病記文庫の設置．医学図書館．56(2)，2009，127-130.
2) 石井保志．医学図書館におけるNarrative Based Medicine（NBM）資料の収集・提供の必要性その1．医学図書館．54(4)，2007，391-394.
3) 健康情報棚プロジェクト．闘病記文庫 棚作成ガイドライン．第1版．2006.
4) 石井保志．患者さんの人生を支える「情報支援」：クリニカルパスを応用したライフマップと健康情報棚．看護学雑誌．72(8)，2008，682-690.

（原稿受付け：2011.5.2）